

## 湯女の魂

泉鏡花作

—

誠に差出がましく恐入りますが、暫時御清聴を煩はします。

八宗の中にも眞言宗には、秘密の法だの、九字を切るだのと申しまして、不思議なことをするのでありますが、尤も此の宗門の出家方は、始めから一寒垢離、斷食など種々な R u b y v 方法で法を修するのでございまして、向うに目指す品物を置いて、之に向つて呪文を唱へ、印を結んで、鍊磨の功を積むのださうであります。

修鍊の極致に至りますと、隱身避水火遁の術などはいふまでもございませぬ、如意自在な法を施すことが出来るのだと申すことで。

或眞言寺の小僧が、夜分墓原を通りますと、樹と

樹との間に白いものがかゝつて、ふら／＼と動いて居た。暗さは暗し、場所柄は場所柄なり、可恐さの餘り齒の根も合はず顫へ顫へ呪文を唱へながら遁げ歸りましたさうであります、翌日見ますと其處に乾かしてございました浴衣が、寸々に裂けて居たと申しますよ、修行も其位になりました此の小僧さんなぞのは、向つて九字を切ります目當に立てゝ置く、竹を切り、棒などが折れるといひます。

然し可加減な話だ、今時那樣ことがある譯のものではないと、或人が一人の坊さんに申しますと、其の坊さんは黙つて微笑みながら、拇指を出して見せました、些と落語家の申します蒟蒻問答のやうでありますけれども、其の拇指を見せたのであります。

そして坊さんが言ふのに、先づ見た處此の拇指に、何の位な働きがあると思はつしやる、譬へば店頭で小僧どもが、がや／＼騒いで居る處へ、來たよといつて拇指を出して御覽なさい、ぴつたりと静りませう、又若い人に一寸小指を見せたら何うであらう、銀座の通で手を舉げれば、鐵道馬車が停るではなか

らうか、最も一つ其上そのうへに笛ふえを添そへて、片手かたてをあげて吹ふき  
鳴ならす事ことになりますと、停ステイション車場しやを汽で車きしやが  
出でますよ、  
使つかひ處ところ、用もちゐる處ところに因よつては、之これが人命じんめいにも關かはれば、  
喜き怒ど哀あい樂らくの情じやうも動うごかします。之これをでかばちに申ました  
ら、國こく家かの安あん危きに係かはるやうな、機き會わいがないとも限か  
らぬ其その拇おやゆび指ゆび、其その小こ指ゆび、其その片手かたての働はたらきで。

然しかるを況いはんや臨りん兵びやう 鬪とう者しや皆かい陣ちん列れつ在前ざいぜんといひ、令れい百ひや  
由くゆじゆん旬じゆん 内ない無む諸しよ哀あい艱げんと唱となへて、四じう縱じやう五ぎやう行ぎやうの九ぐ字じを切き  
に於おては、いかに不ふ思し議ぎの働はたらきをするかも計はかられ  
まい、と申ましたといふことを聞きいたのであります。

いや、餘よ事じを申ま上あげまして恐おそ入それいります、唯たゞ今いま私わたし  
が不ふ束つゝに演えんじまするお話はなしの中なか頃ころに、山さん中ちゆう孤ひと家つかの怪あやし  
い婦をんな人なが、ちゝんぷい／＼御よ代よの御おん寶たからと唱となへて蝙こう蝠もり  
の印いんを結むすぶ處ところがありますから、一ち寸よつと申ま上あげて置おくの  
であります。

扱さててこれは小こ宮みや山まじや良りやう介けいといふ學がく生せいが、一なつ夏ほく北くり陸く道だう  
を漫まん遊いゆうしました時とき、越えつ中ちゆうの國くにの小お川かわといふ温おん泉せんから  
湯ゆ女なの魂たましひを託たくつて、遙は々やうやう東とう京きやうまで持もつて參まつたと

いふお話。<sup>はなし</sup>

越中<sup>えつちゆう</sup>に泊<sup>とまり</sup>と云<sup>い</sup>つて、家数<sup>いえかず</sup>千軒<sup>せんけん</sup>ばかり、一寸<sup>ちよつと</sup>繁盛<sup>はんじやう</sup>な町<sup>まち</sup>があります、伏木<sup>ふしき</sup>から汽船<sup>きせん</sup>に乗りますと、富山<sup>とやま</sup>の岩瀬<sup>いはせ</sup>、四日市<sup>かいち</sup>、魚津<sup>うをつ</sup>、泊<sup>とまり</sup>となつて、それから糸魚川<sup>いといがは</sup>、關<sup>せき</sup>、親不知<sup>おやしらす</sup>、五智<sup>ごち</sup>を通<sup>とほ</sup>つて、直江津<sup>なほえつ</sup>へ出<sup>で</sup>るのであります。小宮山<sup>こみやま</sup>は其日<sup>そのひ</sup>、富山<sup>とやま</sup>を朝立<sup>あさだち</sup>、此<sup>こ</sup>の泊<sup>とまり</sup>の町<sup>まち</sup>に着<sup>つ</sup>いたのは、午後<sup>ご</sup>三時<sup>さんじ</sup>半頃<sup>はんころ</sup>。繁盛<sup>はんじやう</sup>な處<sup>ところ</sup>と申<sup>まを</sup>しながら、街通<sup>かいだう</sup>が一<sup>すぢ</sup>條海<sup>ちうみ</sup>に添<sup>そ</sup>つて居<sup>を</sup>りますばかり、裏町<sup>うらまち</sup>、横町<sup>よこまちやう</sup>などと、謂<sup>い</sup>つてもないのであります、其<sup>そ</sup>の町<sup>まち</sup>の半頃<sup>なかばころ</sup>の唯<sup>とあ</sup>有<sup>ちやみせ</sup>る茶店<sup>ちやみせ</sup>へ、草臥<sup>くたび</sup>れた足<sup>あし</sup>を休<sup>やす</sup>めました。

澁茶を喫しながら、四邊を見る。街道の景色、又  
 格別でございまして、今は驛路の鈴の音こそ聞えま  
 せぬが、馬、車、處の人々、本願寺詣の行者の類、  
 これに豆腐屋、魚屋、郵便配達などが交つて往來引き  
 も切らず、「早稲の香や別け入る右は有磯海」と  
 云ふ芭蕉の句も、此邊といふ名代の荒海、此處な三  
 十噸、乃至五十噸の越後丸、觀音丸などと云ふのが、  
 入れ違ひまする煙の色も荒海を乗越す為か一際濃く、  
 且つ勇ましい。

茶屋の裏手は遠近の山又山の山續きで、其日の靜  
 かなる海面よりも、一層却つて高波を蜿らしてゐる  
 やうでありました。小宮山は、快く草臥を休めまし  
 たが、何か思ふ處あるらしく、此の茶屋の亭主を呼  
 んで、

「御亭主少し聞きたい事があるんだが。」  
 「へい、お客様、何でもござりますな。」

氷見鯖の鹽味、放生津鱈の善惡、糸魚川の流れ鹽  
 梅、五智の如來へ海豚が參詣を致しまする様子、其

の鳴聲、最些と遠くは、越後の八百八後家の因縁でも、信濃川の橋の間数でも、何でも存じて居りますから、はゞはゞ。」

と片肌脱、身も軽いが、口も軽い。小宮山も莞爾して、

「折角だがね、先づそれを聞くのぢやなかつた

よ。」

「それはお生憎様でござりまするな。」

何が生憎。

「私の聞きたいのは、此處に小川の温泉と云ふのがあるツて、其事なんだが何うだね。」

「えゝ、ござりまするとも、人足も通ひませぬ山中で、雪の降る時白鷺が一羽、疵所を浸して居りましたのを、狩人の見付けましたのが始りで、つい此の八九年前から開けました。一體、此の泊の或財産家の持地でござりまするので、假の小屋掛で近在の者へ施し半分に遣つて居りました處、さあ、盲目が開く、壁が立つ、子供が産れる、乳が出る、大した効能。いやもう、神の如しとござりまして、所々方々から、彼岸詣のやうに、ぞろ／＼と入湯に参ります

る。

處で、二階家を四五軒建てましたのを今では譲受けた者がござりまして、座敷も綺麗、お肴も新らしい、立派な本場の温泉となりまして、私は恧やうな田舎者で存じませぬが、何しろ江戸の日本橋ではお医者様でも有馬の湯でもと云うた處を、藝者が、小川の湯でもと唄ふさうでござりますが、其邊は旦那御存じでござりませうな。如何様で。」

反對に鐵砲を向けられて、小宮山は開いた口が塞がらず。

「土地繁盛の基で、それはお目出度い。時に、其小川の温泉までは、何のくらゐの道だらう。」

「はゝあ、之から被行しやるのでござりますか。それならば、山道三里半、車夫などにお尋ねになりますれば、五里半、六里などと申しますが、それは丁場の代償で、本當に譯はないのでござりまする。」

「ゝふむ、三里半だな可し。そして何かい柏屋と云う温泉宿は在るかね」

「柏屋！ えゝもう小川で一等の旅籠屋、畳も此頃入換へて、障子も此頃張換へて、お湯もどんどん沸いて居ります。」と年甲斐もない事を言ひながら、亭主は小宮山の顔を見て、いやに聲を密めたのでありますな、怪からん。

「へゝゝ、好い婦人が居りますぜ。」

「何を言つて居るんだ。」

「へゝゝ、お湯をさして参りませうか。」

「お茶も多度頂いたよ。」

と小宮山は傍を向いて、飲さしの茶を床几の外へざぶり明けて身支度に及びます。



小宮山は亭主の前で、女の話が冷然として勿ね附  
 けましたが、密に思ふ處がないのではありませぬ。

一體此の男には、篠田と云ふ同窓の友がありまして、  
 いつでも其の口から、足下若し折があつて、北陸道  
 を漫遊したら、泊から譯はない、小川の温泉へ行つ  
 て、柏屋と云ふのに泊つて見る、於雪と云つて、根  
 津や、鶯谷では見られない、田舎には珍らしい、  
 佳い女が居るからと、度々聞かされたのであります  
 が、唯、佳い女が居るとばかりではない、其が篠田  
 とは淺からぬ關係があるやうに思はれます、小宮  
 山は何の道一泊するものを、乾燥無味な旅籠屋に寐  
 るよりは、多少色艶つばい其の柏屋へと極めたので。

扨て、亭主の口と盆の上へ、若干かお鳥目はず  
 んで、小宮山は紺飛白の單衣、白縮緬の兵兒帯、  
 麥藁帽子、脚絆、草鞋と云ふ扮装、荷物を振分にし  
 て肩に掛け、既に片影が出来て居りますから、蝙蝠  
 傘は疊んで提げながら、茶店を發つて、従是小川温  
 泉道と書いた、傍示杭に沿いて参ります。

行くこと凡そ二里ばかり、それから爪先上りのだら／＼坂になつた、其れを一里半、泊を急ぐ旅人の心には、彼是三里餘も來たらうと思ふと、漸く小川の温泉に着きましてございます。

志す旅籠屋は、尋ねると直ぐに知れた、有名なもので、柏屋金藏。

其のまゝ、ずっと小宮山は門口に懸ります。

「被入しやいまし。」

「お早いお着。」

「お疲れ様で。」

と下女共が口々に出迎へます。

帳場に居た亭主が、算盤を押遣つて、

「これ、お洗足を。それ御案内を。」

とちやはや、貴公子に對する待遇。服装もお聞きの通り、それさへ、汗に染み、埃に塗れた、草鞋穿の旅人には、過ぎた扱ひをいたします。此の温泉場は、泊から纔か四五里の違ひで、雪が二三尺も深

いのでありまして、冬向は一切浴客はありませんで、  
野猪、狼、猿の類、鷺の進、雁九郎など、云ふ珍  
客に明け渡して旅籠屋は泊の町へ引上げるくらゐ。  
賑ひますのは花の時分、盛夏三伏の頃、唯今は最う  
九月 中旬、秋の初で、北國は早く涼風が立ちますか  
ら、之が逗留の客と云ふ程の者もなく、二階も下も  
伽藍堂、偶まのお客は、難船が山の陰を見附けた心  
持でありますから。

「此方へ。」と婢女が、先に立つて導きました、  
奥座敷上談の廣間、京間の十疊で、本床附、疊は滑  
るほど新らしく、襖 天井は輝くばかり、誰の筆と  
も知らず、薬草を銜へた神農様の畫像の一軸、之を  
床の間の正面に掛けて、花は磯馴、彼處等は遠州が  
流行りまする處で、亭主の好きな赤烏帽子、行儀を  
崩さず生かつて居る。

小宮山は其の前に、悠然と控へました。

扱て、お茶、煙草盆、御挨拶は略しまして、頓て  
持つて来た浴衣に着換へて、一風呂浴びて戻る。誠  
や温泉の美しくさ、肌、骨までも透通り、そよ／＼

と風が身に染みる、小宮山は廣袖を借りて手足を伸  
ばし、打縦いでお茶菓子の越の雪、否、廣袖だの、  
秋風だの、越の雪だのと、お愛想までが薄ら寒い谷  
川の音ももの寂しい。

湯上りで、眠氣は差したり、道中記を記けるも懶  
し、入る時帳場で聲を懸けたのも、座敷へ案内をし  
たのも、浴衣を持つて来たのも、お背中を流しませ  
うと言つたのも、皆手隙と見えて、一人々々入交つ  
たが、根津、鶯谷は扱て置いて、柳原にもない顔だ、  
於雪と云ふのは何うしたらう、おや女の名で、又寒  
くなつた、是れぢや晩に熱爛で一杯遣らずばなるま  
い。

#### 四

鮎あゆの大きいのは越中えつちうの自慢じまんであります、最早落もはやおち鮎あゆになつて居をりますけれども、放生津ほうしやうつの鱈たらや、氷見ひみの鯖さばより優ましでありますから、魚田ぎよでんに致いたさせまして、吸物すひものは湯山ゆさんの初茸はつたけ、後は玉子焼たまごやきか何かで、一銚子てうしつけさせまして、杯洗はいせんの水みづを切きるのが最初はじまり。

「姉さん、お前に一つ。」

などゝ申まをしまする時分じぶんには、小宮山こみやまも微醉ほろ酔ひ機嫌きげん向むかうについてをりますのは、目指めざすお雪ゆきではなくて、初霜はつしもとや謂いはむ。薄うすく塗ぬつた感心かんしんに襟脚えりあしの太ふとくない、二十歳はたちばかりの、愛嬌あいけうたつぷりの女をんなで、二つ三つは行ゆける口くち、四方山よれやまの話はなしも機はずむ處ところから小宮山こみやまも興きやうに入り、思おもはず三四合がふを傾かたむけまする。

後うしろの花はなが遠州えんしうで、前まへの花はなが池いけの坊ぼうに座ざを構かまへ、小宮山こみやまは古流こりうと云いふ身みで、くの字じになり、些ちよいと杯さかづきを差置しおきました、

「姉さん、新あたらしく尋たづねるまでもないが、此處こゝは

たしか柏屋だね。」

「はい、然やうでございますよ。」

「柏屋だとすると其の何、姉さんが一人ある筈だ

ね。」

「皆で四人。」

「四人？」

成程四人かね。」

「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でござ

います。」

「何、お雪さんと云ふのが居る？」

と小宮山は、金の脈を掘當てましたな、預ての話が事實となつたのでありますから、漫に勇んだので乗出しやうが尋常事でありませんかから、

「おや。」

小宮山は故とらしく威儀を備へ、

「然うだ、お前さんの名は何と云ふ。」

「然うだは御挨拶でございますこと、私は名も何

もございませんよ。」

「いゝえさ、何と云ふのだ。」

「お雪さんにお聞きなさいまし、貴方は御存じで

被<sup>いら</sup>在<sup>ら</sup>しやるんだよ、可<sup>に</sup>僧<sup>くら</sup>しうございますねえ、でも  
あのお氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>さまでございますこと、お雪<sup>ゆき</sup>さんは貴<sup>あな</sup>  
方<sup>た</sup>、久<sup>ひさ</sup>しい間<sup>あひだ</sup>病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>で臥<sup>ふせ</sup>つて居<sup>を</sup>りますが。」

「何<sup>なに</sup>、病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>だい、」

「はあ、ぶら／＼病<sup>やまひ</sup>なんでございますが、此<sup>この</sup>頃<sup>ころ</sup>は  
又<sup>また</sup>氣<sup>き</sup>候<sup>こう</sup>が變<sup>かは</sup>りましたので、めつきりお弱<sup>よわ</sup>んなすつた  
やうで、取<sup>とり</sup>亂<sup>みだ</sup>して居<sup>を</sup>りますけれど、貴<sup>あなた</sup>方<sup>ごよう</sup>御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>ならば  
些<sup>ちよ</sup>いとお呼<sup>よ</sup>び申<sup>まを</sup>して見<sup>み</sup>ませうか。」

「いえ、何<sup>なに</sup>、それによ<sup>およ</sup>ばないよ。」

「あのう、屹<sup>きつ</sup>度<sup>と</sup>参<sup>まゐ</sup>りませうよ、外<sup>ほか</sup>ならぬ貴<sup>あなた</sup>方<sup>さま</sup>様の  
事<sup>こと</sup>でございますもの。」

「何<sup>ど</sup>うでせうか、此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>様<sup>さま</sup>にも御<sup>ご</sup>存<sup>ぞん</sup>じはなしさ、たゞ  
好<sup>い</sup>い女<sup>をんな</sup>だつて途<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>で聞<sup>き</sup>いて來<sup>き</sup>たもんだから、何<sup>ど</sup>うぞ  
惡<sup>あし</sup>しからず。」

「何<sup>ど</sup>う致<sup>いた</sup>しまして、憚<sup>はは</sup>様<sup>さま</sup>。」

と言<sup>い</sup>つたばかり、些<sup>ちよ</sup>いと言葉<sup>ことば</sup>が途<sup>と</sup>絶<sup>だ</sup>えましたから、  
小<sup>こ</sup>宮<sup>みや</sup>山<sup>ま</sup>は思<sup>おも</sup>ひ出<sup>だ</sup>したやうに、

「何と云ふのだね、お前さんは。」

「手前は柏屋でございます。」

小宮山は苦笑を致しましたが、已む事を得ず、

「それぢや柏屋の姉さん、一つ申上げることにし

よう。」

「まあお酌を致しませう。私だつて可いぢやあり

ませんか、あれさ。」

「いや全く。お雪さんでも、酒はもう可かんのだ

よ。」

「それぢや御飯をおつけ申しませう、ですがお給仕となると猶の事、誰かにおさせなさりたうござい

ませうね。」

「何、それにや及ばんから、御臈肩分に盛を可く、

ね。」

「いえ、道中筋で盛の可いのは、御家來衆に限り

ますとさ、殿様は軽く多度換へて召食りまし。はい、

御膳。」

「洒落かい、いよ柏屋の姉さん、本當に名を聞か

せておくれよ。」



「てまへ手前はかしはや柏屋でございます。」

「まへお前のな名をと問ふのだよ。」

「てまへ手前はかしはや柏屋でございます。」

とじやうず上手にごはん御飯をよそ装ひながら、ぼたぼた／＼あいけう愛嬌をこぼ溢し  
ますよ。

御膳の時さへ、何かと文句があつたほど、此の分  
 では寝る時は容易でなからうと、小宮山は内々恐縮  
 をして居りましたが、女は大人しく床を伸べて了ひ  
 ました。夜具は申すまでもなく、絹布の上、枕頭の  
 火桶へ湯沸を掛けて、茶盆をそれへ、煙草盆に火を  
 生ける、手當が行届くのであります。

餘の上首尾、小宮山は空可恐しく思つて居ります。  
 女は慇懃に手を突いて、

「それでは、お緩り御寐みなさいまし、未だお早  
 うございますから、私共は皆起きて居ります、御用  
 がございましたら御遠慮なく手をお叩き遊ばして、  
 それからあのお湯でございませうが、一晚沸いて居り  
 ますから、幾度でも御自由に御入り遊ばして、お草  
 臥にれ、お體にも大層利きますんでございますよ。」  
 と大人しやかに眞面目な挨拶、殊勝な事と小宮山  
 も更り、

「色々お世話だつた。お蔭で心持好く手足を伸す

よ、姐さんお前ももう休んでおくれ。」「はい、  
難有うございます、それでは。」

と言つて行かうとしましたが、弗と坐り直しまし  
たから、小宮山は、はてな、柏屋の姐さん、こゝら  
で其の本名を名告るのかと可笑しくもございます。

すると、女は後先を二しましたが、じり／＼と寄  
つて参り、

「時につかぬ事をお伺ひ申しまして、恐れ入りま  
すが貴方は方々御旅行をなさいます、可恐しい目  
にお逢ひ遊ばした事はございませんか。」

小宮山は、妙な事を聞かと思ひましたが、早速、  
「いや、幸ひ暴風雨にも逢はず、海上も無事で汽  
車に間違もなかつた。道中の胡麻の灰などは難有い  
御代の事、それでなくつても、見込まれるやうな金  
子も持たずさ、足も達者で一日に八里や十里の道は、  
團子を噛つて野々宮高砂と云ふのだから、つひぞま  
あ是が可恐しいと云ふ目に逢つた事はないんだよ。」

「いえ、那樣事ではないのでございます。狸が化

けたり、狐が化けたり、大入道が出ましたなんて、言ふやうな、其の事でございます。」

「馬鹿な事を言つちや可かん、子供が大人になつたり、嫁が姑になつたりするより外、今時化けるつて奴があるものか。」と一言の許に笑つて退けたが、小宮山は此女何を言ふのか知らと、却つて眉毛に唾を附けたのであります、女は極く生で、

「實はお客様、誠に申兼ねましたが、少々お願いがございませぬですよ、外の事ではありませぬが、曩貴方のお口からも、些いとお話のございました、あのお雪さんの事でございますが、佳い女は何故那二に體が弱いのでございませうねえ。平生からの處へ、今度煩ひ附きまして、最う二月三月、十日ばかり前から、又大變に悩みますので、醫者と申しませも、三里も參らねばなりません。薬も何も貴方何の病氣だか、誰にも考へが付きませぬので、たゞもう體の補ひになりますやうなものを食べさせて置くばかりでございますが、此頃ぢや段々痩せ細つて、お粥も薄いのでなければ戴かないやうになりました。氣心の好い平生大人しい人でありますから、私共始

め御主人も、彼是氣を揉んで居りますけれども、何  
處が痛むと云ふではなし、苦しいといふではなし、  
<sup>いた</sup>勞りやうがないのでございますよ。それでね、貴方、  
其の病氣と申しますのが、風邪を引いたの、お肚を  
痛めたのと云ふのではない様子で、まあ、申せば、  
何か生靈が取着的とか、狐が見込んだとか云ふの  
でございませう。何でも悩み方が變なのでございま  
すよ。其の證據には毎晩同じ時刻に魘されてしま  
ね。

小宮山も他人ごとのやうには思ひませぬ。

「其時は甚■に可恐しうございませう、苦しいの、切ないの、一層殺して欲しいの、が呻きまして、ひい／＼泣くんでございますもの、そしてね貴方、誰かを掴へて話でもするやうに、何だい誰だ、など、言ふではございませんか、其時はもう内曲の者一同、傍へ参ります處ではございませんよ、何だつて貴方、異類異形のものが、病人の寐間にむら／＼して居りますやうで、遠くにゐて皆が耳を塞いで、突伏して了ひますわ。

それですから、其の苦しみます時傍に附いて居て、撫で擦りなど為る事は誰も怪我にも出来ません。病人は薬より何より、たゞ一晩おち／＼心持好く寐て、何うせ助らないものを、切めてそれを思ひ出して死にたいと。肩息で貴方ね、口癖のやうに申すんですよ、何うぞまあそれだけでも協へて遣りたいと、皆が心配をしますんですが、加持祈祷と申しまして、も、何うして貴方此邊等は皆 狸の法印、章魚の入道ばつかりで、當になるものはありやしませぬ。

それに、本人を倚掛らせますのには、しつかりな  
すつて、自分でお雪さんが頼母しがるやうな方な  
くつちや可けますまい、それですのに些い／＼お見  
えなさいまする、何のお客様も、お止し遊ばせば可  
いのに、お妖怪と云へば先方で怖がります、田舎の  
意氣地無しばかり、俺は蟒蛇に吞まれて天窓が禿げ  
たから湯治に來たの、狐に蚯蚓を食はされて、それ  
が為お肚を痛めたの、天狗に腕を折られたの、私共  
が聞いてさへ、馬鹿々々しいやうな事を言つて、そ  
れが眞面目だらうぢやありませんか。

ですもの、何うして病人の力になんぞ、なつてく  
れる事が出来ませう。

怗う申しちや押着けがましうございませうが、貴方  
はお見受け申したばかりでも、那樣怪しげな事を爪  
先へもお取上げ遊ばすやうな御様子は無い、本當に  
頼母しくお見上げ申しますんで。

實は病人は貴方の御話を致しました處、然うでな  
くつてさへ東京のお方と聞いて、病人は飛立つばか  
り、何うぞお慈悲にと申しますのは、私共からもお  
願ひ申して上げますのでございませうが、誠に申し兼

ねました、一晩お傍で寐かし被下いまして、然うして本人の願を協へさして遣つて下さいまし、後生でございますから。

それに様子をお見届け下さいませれば、甚二にか難有うございませう。」

と染々、早口の女の聲も理に落ちまして、所謂誠は其の色に顕れたのでありますから、唯今怪しい事などは、身の廻り百由旬の内へ寄せ附けないと云ふ見立てに預りました小宮山も、是を信じない譯には行かなくなつたのであります。

「そりや何しろ飛だ事だ、私は武者修行ぢやないのだから、妖怪を退治ると云ふ腕節はないかはりに、幸ひ臆病でないだけは、御用に立つて、可いとも！望みなら一晩看病をして上げよう。左も右も今其の話を聞いても、其の病人を傍へ寐かしても、何うか可恐しくないやうに思はれるから。」

と小宮山は友人の情婦ではあり、煩つて居るのが可哀さうでもあり、殊には血氣壯なもの的好奇心も手傳つて、異議なく承知を致しました。



「然し姐さん、別々に為るのだらうね。」

「何でございます。」

「何其の、お床の儀だ。」

「おほ、お雪さんにお聞きなさいまし。」

「可煩いな、まあ可いや。」

「然やうならば、何うぞ。」

「可し／＼。其換姐さん、お前の名を言はない

のぢや……、」

「手前は柏屋でございます。」

と急いで出て行く。是からお雪、良助、寐物語と  
云ふ、物凄い事に相成りまする。

「是は旦那様。」

入交つて亭主柏屋金藏、揉手を為ながら曩に挨拶に來た時より、打解けまして馴々しく、

「何うも行届きませんで、御粗末様でございます

す。」

「いや色々、さあずツと此方へ、何か女中が御病氣ださうで、お前さんも、何かと御心配でありませう。」

「へい、其の事に就きまして、唯今は又飛んだ手前勝手な御難題、早速御聞濟下さいまして何とも相濟みませぬ。實は私からお願ひ申しまする筈でございますりましたが、恚やうなものでも、主人と思召し、成りませぬ處を斷つても御承知下さいますやうでは、恐れ入りますから、御斷の遊ばし可いやう、故と女共から御話を致させましたのでござりまするが、恚やうに御心安く御承諾下さいましては、却つて失禮になりましてござりまする。早速當人にも相傳へまして、久しぶりで飛んだ喜ばせて遣りました。全

く御蔭様でござりまする。何が貴方、豫ての心懸が  
宜しうござりまするので、私共もはや、特別に目を懸  
けまして、他人のやうに思ひませぬから、毎晩魔さ  
れまするのが、目も當てられませぬ、然ればと申し  
て、目を塞いで寐まする譯には参りませぬ、いや  
もう。」

と言懸けて、一〇〇頷く小宮山の顔を見て、てか/  
とした天窓を掻き、

「恚やうな頭を致しまして、あてこともない、化  
物沙汰を申上げまするばかりか、譚語に薬にもなり  
ませんと云ふは、誠に早や以ての外でござりますが、  
自慢にも何にもなりません、生得大の臆病で、引窓  
がばたりと云つても箒が仆れても怖な吃驚。

それに何と、如何に秋風が立つて、温泉場が寂れ  
たと申しまして、まあお聞き下さいまし。飛でも  
ない奴等、若者に爺婆交りで、泊の三衛門が百萬遍  
を、何でござりませう、此の湯治場へ持込みやがつ  
て、今に聞いて被在隣宿で始めますから、けた  
いが悪いぢやござせんか、此節あ毎晩だ、五智で海  
豚が鳴いたつて、那二不景氣な聲は出しますまい。

憑物のある病人に百萬遍の景物ぢや、いやもう泣きたくなりませう。はゝはゝ、泣くより笑とは此事で、何に就けてもお客様に御迷惑な。」

「何有、此方の迷惑より、然う云ふ御様子では嘸御當惑をなさるでありませう、恚う遣つてお世話になるのも何かの御縁でせうから、皆さん遠慮しないが宜しい。」

と二人で差向で話をして居ります内に、お喜代、お美津でありませう、二人して夜具をいそゝと持運び、小宮山のと並べて、臥床を設けたのであります。客の前と氣を着けましたか、使つてるものには立派過ぎた夜具、敷蒲團、疊んだまゝ裾へふつかりと一つ、それへ乗せました枕は、病人が始終黒髪を取亂して居るのでありませう、夜の具の清らかなるには似ず垢附きまして、思做しか、涙の跡も見えたのであります。

お美津、お喜代は、枕の兩傍へ些いと屈んで、きうツノゝと眞直に引直し、小宮山に挨拶をして、廊下の外へ。

此處へ例の女の肩に手弱やかな片手を掛け、惱ましい體を、少し倚懸り、下に浴衣、上へ縷子の襟の掛つた、縞物の、白粉垢に冷たさうなのを襲ねて、寐衣のまゝの姿であります、幅狭の巻附帯、髪は櫛巻にして居りますが、然まで結ばれても見えませぬのは、客の前へ出るといふので櫛の齒に女の優しい心を籠めたものでありませう。年紀の頃は十九か二十歳、色は透通る程白く、鼻筋の通りました、窠れても下脹な、見るからに風の障るさへ痛々しい、葛の葉のうらみ勝なる其の風情。

高が氣病と聞いたものが、思ひの外のお雪の様子、小宮山は先づ哀れさが先立つて、主と顔を見合せます。

介添の女は故と浮いた風で、

「さあ御縁女様。」と強く手を引いて扶け入れたのであります。お雪は那様中にも、極が悪かつたと見え、ぼんやり顔をば赧らめまして、あはれ霜に悩む秋の葉は美しく、蒲團の傍へ坐りました。

「お雪さん、嬉しいでせう。」

亭主までが嬉しさうに、莞爾々々して、

「能くお禮を申上げな。」

と言ふのであります。別けて申上げますが、是から立女役が総て女寅が煩つたと云ふ、優しい哀れな聲で、ものを言ふのであります。春葉君だとな代の良い處を五六枚、上手に使ひ分けて、誠に好都合でありますけれども、私の地聲では、些とも情が寫りますまい。其邊は大目に、否、お耳にお聞溢しを願ひまして、お雪は面映氣に、且つ優ら

しく手を支へ、

「難有う存じます、何うぞ、……」

とばかり、取継るやうに申しました。小宮山は、

亭主と云ひ、女中の深切、お雪の風采、其や是や胸

一杯になりまして、思はずほろりと致しましたが、

然りげなう、唯頷いて居たのであります。

「そらお雪、何うせ恚うなりや御厄介だ。お時儀

も御挨拶も既に通り越して居るんだからの、御遠慮

を申さないで、早く寐かして戴くと可い、寒いと悪

からう。俺でさへぞく／＼する、病人は猶の事ツた、

お客様も最う御寐なりまし、お鐵や、それ。」

と急遽して、實は逃構も少々此の臆病者は、病人

の名を聞いてさへ、慄然とする様子で。

お鐵（此奴あ念を入れて名告る程の事ではなかつた）は袖屏風で、病人を勞つて居たのであります

が、

「さあ／＼早く其の中へ、お床は別々でも、お前

さん何だよ御婚禮の晩は、女が先へ寐るものだよ、

まあさ、御遠慮を申さないで、同じ東京のお方ぢや

ないか、裏の山から見えるなんて、噂ばかりの日本橋のお話でも聞いて、ぐつと氣をお引立てなさいかね。水道の水を召食ツて被在しやれば、お色艶もそれ、お前さんの那の方に、ねえ旦那。」

「先づの。」

と言つたばかりで、金藏はまじり／＼。大方時刻の移るに従うて、百萬遍を氣に為るのでありませう。お鐵は元氣好く含羞むお雪を柔かに素直に寐かして、袖を叩き、裾を壓へ、

「さあ、お客様。」

と言つたのでありますが、小宮山も人目のある前で枕を並べるのは、氣が差して跋も悪うございませから、

「まあ、お前さん方。」

「然やうならば、御免を蒙ります。伊賀越でおいでなすつたお客ぢやないから、私が股引穢うても穿いて寝るには及ばんわ、喃お雪。」

「旦那笑談ではございませんよ、失禮な。お客様



ごめんくだ  
御免下さいまし。」

と二人は一所に挨拶をして、上段の間を出て行きます、親仁は兩提の蓑入をぶら提げながら、克明に禿頭をちやんと据ゑて、てく／＼と敷居を越えて、廊下へ出逢頭、わつと云ふ騒動。

「痛え。」とあいたしこをした様子。

曩から障子の外に、様子を窺つて居りましたものと見える、誰か女中の影に怯えたのであります。笑ふやら、喚くやら、ばた／＼と云ふ内に、お鐵が障子を閉めました。後の十畳敷は寂然と致し、二筋の燈心は二人の姿と、床の間の花と神農様の像を、朦朧と照します。

小宮山は所在無さ、頓て横になつて衾を肩に掛け  
 ましたが、お雪を見れば少さやかにふつかたと臥し  
 て、女雛を綿に包んだやうであります。素より内  
 氣な女の、先方から聲を懸けやうとは致しませんぬ  
 小宮山は一晩介抱を引受けたのであたまするから、  
 先ず醫者の氣になりますと物もいひ好いのでありま  
 した。

「姉さん、然ぞ心細いだらうね、お察し申す。」

「はい。」

「一體甚二」一心持なんだい。何でも悪い夢は、  
 明かしてばツばと言ふものだと言ふのだから、  
 心配事は人に話をする方が、氣が霽れて、其れが何  
 より保養になるよ。」と染々勞つて問ひ慰める、眞  
 心は通つたと見えまして、少し枕を寄せるやうにし  
 て、小宮山の方を向いて、お雪は溜息を吐きました  
 が、

「貴方は東京のお方でございますつてね。」

「うむ、東京だ、是でも江戸ッ兒だよ。」

「あの、然う伺ひますばかりでも、私は故郷の人に逢ひましたやうで、お可懐しいのでござりますよ。」

「東京が鼻肩かい、それは難有いね、而して此處等に鼻肩は珍しいが、何か仔細が有りさうだな。」

小宮山は、聞きませんでも其の因縁を知つて居りませう、けれども、思ふさま心の内を話さして、左に右慰めて遣りたい心。

「東京は大層廣いさうでございますから、泊のものを、此方で存じて居りますやうな譯には參りますまいけれども、あのう、私は篠田様と云ふ、貴方の御所の方に、少し知己があるのでございまして。」

小宮山は肚の内、是だな。

「譯は申上げる事は出来ませんが、其のお方の事が始終氣に懸りまして、其が為に、いつでも泣いたり笑つたり、自分でも解りませんほど、氣を揉んで居りました。それがあの、病の原因なんでございませう。晝も夜も何方で夢を見るのか解りませんやうな心持で、始終ふら／＼致して居りましたが、お薬

も戴いたきましたけれども、復なほつてから何どうと云いふ張はり合あひがありませんから、弱よわりますのは體からだばかり、日ひが經たちますと起おきてるのが大たい儀ぎでなりませので、何ど處こが痛いたむと云いふでもなく、寐ねてばかり居をりましたのでございますよ。」

さあ驕おごれ、手ても無なくそれは戀こひ病わづらひだと、此こゝ處ゝで言いはれた譯わけではありませんから、小こ宮みや山まは人ひとの意い氣き事ことを畏かしこまつて聞きかされたのであります、勿も論ろん容やう體たいを聞きく氣きでありますから、お雪ゆきの方ほうでも、醫い者しやだと思おもつて遠えん慮りよがない。

「久ひさしく那そんな樣やうに致いたして居をります内うち、丁ちやう度ど此この十じ日かばかり前まへの眞ま夜よ中なかの事ことでございます。寐ねられませぬ目をばち／＼して、瞶みつめて居をりました壁かべの表おもてへ、繪ゑに描かいたやうに、茫ぼん然やり、可お恐そろしく脊せの高たかい、お神かみさんの姿すがたが顯あらはまして、私わたしが夢ゆめかと思おもつて、熟ざつと瞶みつめて居をります中うち、聲あしおと音ともせず壁かべから抜ぬけ出して、枕まくら頭むちとへ立たちましたが、面おも長ながで險けんのある、鼻はなの高たかい、凄すこいほど好いい年とし増まなんでございますよ。それが貴あ方なた、着き物ものも顔かほも手て足あしも、稻いな光ひかりを浴あびたやうに、蒼まつ然さで判はつ然きり

と見ええました。」

「可訝しいね。」

「當然なら、あれとか、きやつとか聲を立てますのでございますが、何う致しましたのでございますか、別に怖いとも思ひませんと、恚う遣つて。」  
と枕に顔を仰向けて、清しい目を二つて熟と瞳を据ゑました。小宮山は悚然とする。

「其のお神さんが、不思議

一ではありませんか、ちやんと私の名を存じて一居りまして。

（お雪や、お前、餘り可哀さうだから、私が其の病気を復して上げる、一所においで。）と立ッたまゝ手を引くやうに致しましたが、いつの間によら私の體は、那の壁を抜けて戸外へ出まして、見覺のある裏山の方へ、冷たい草原の上を、貴方、跣足ですた／＼參るんでございます。」

「零餘子などを取りに参ります處で、知つて居りますんでございますが、那様家はある筈はございません、破家が一軒、それも茫然して風が吹けば消えさうな、其處が住居なんでございませう。お神さんは私を引入れましたが、内に入りますと貴方何うでございませう、土間の上に臺があつて、荒筵を敷いてあるんでございますよ、其處等は一面に煤ぼつて、土間も黴が生えるやうに、じく／＼して、隅の方に、お神さんと同じ色の眞蒼な灯が、ちよろ／＼と點れて居りました。

（何うだ、お前此處にあるものを知つてるかい。）とお神さんは、其の筵の上にあるものを、指をして見せますので、私は恐々、覗きますと、何だか厭な匂のする、色々な雑物がございましたの。

（是はの、皆人を磔に上げる時に結へた繩だつて扱いて見せるのでございます。私はもう、氣味が悪いやら怖いやら、がた／＼顫へて居りますと、お神

さんがね、貴方、ざくりと釘を掴みまして、

（此の釘は丑の時參が、猿丸の杉に打込んだので、呪の念が錆附いてゐるだらう、能くお見。是はね大工が家を造る時に、誤つて守宮の胴の中へ打込んだものぢや、それから難破した船の古釘、此にあるのは女の抜髪、蜥蜴の尾の切れた、ぴち／＼動いてるのを見なくちや可けない。と差附けられました時は、ものも言はれません。

（お雪、私か是を何にする、定めしお前は知つてゐよう。） 何うして私が知つて居りませう。

（うむ、知つてる、知つて居る筈ぢやないか、何うだ。）と責めるやうに申しますから、私は何うなる事でせうと、可恐しさのあまり、何にも存じませんと、自分にも聞えませんくらゐ。

（何存ぜぬ事があるものか、これはな、お雪、お前の體に使ふのだ、是で其の病氣を復して遣る。）と屹と睨んで言はれましたから、私はもう舌が硬つて了りましたのでございます。お神さんは落着き拂つて、何か身繕をしましたが、呪文のやうなことを

唱へて、其の釘だの繩だのを、ばら／＼と私の體へ  
投附けまらずやありませんか。

はツと思ひますと、手も足も顫へる事が出来なくなつたので、何うでございませう、其のまゝ眞直に立つたのでございますわ。

然う致しますとお神さんは、棚の上から又一つの赤い色の壇を出して、口を取つて又呪文を唱へますとね、黒い煙が立登つて、むら／＼とそれが、あの土間の隅へ寛がります、と其中へ、おどろのやうな髪を亂して、目の血走つた、鼻の尖つた、瘦ツけた女が、俯向けなりになつて、ぬつくり顛れたのでございますよ。

（お雪や、是は嫉妬で狂死をした怨念だ。是を此處へ呼び出したのも外ぢやない、お前を復して遣る其の用に使ふのだ。）と申しましてね、お神さんは突然袖を捲つて、其の怨念の胸の處へ手を當てゝ、ずうと突込んだ、思ひますと、岸破と口が開いて、  
舉が中へ。」

と言懸けました、聲に力は籠りましたけれども、



からだ  
體は一層力無げに、幾度も溜息を吐いた、お雪の顔  
は蒼ざめて参ります。小宮山は我を忘れて枕を半

「其のまゝ眞白な肋骨を一筋、ぼきりと折つて抜  
取りましてね。」

（何うだ、手前が嫉妬で死んだ時の苦しみは、何  
と此のくらゐのものだつたかい。）と怨念に向ひ  
まして、お神さんが然う云ひますと、あの、其の怨  
霊がね、貴方、上下の齒を食ひ緊つて、（うゝむ、  
うゝむ。）と二つばかり、合點々々を致したので  
ございますよ。

（可し。）とお神さんが申しますと、怨念は又  
曩のやうな幅の廣い煙となつて、それが段々罫の口  
へ入つて了りました。其からでございますが。」

とお雪は打戦いて、暫くは口も利けません様子。

扱さてて其その時ときお雪ゆきが話はなしましたのでは、何なんでも其その孤ひと  
 家の不ふ思議しぎな女をんなが、件くだんの嫉しつと妬とで死しんだ怨をんりやう靈りやうの胸むねを發あは  
 いて抜ぬき取とつたと云いふ肋骨あはらほねを持もつて前ぜん申まをしまする通とほり、  
 釘くぎだの繩なはだのに、呪のろはれて、動うごくこともなりません  
 で、病やみ衰おとろへて居をりますお雪ゆきを、手てとも謂いはず、胸むね、  
 肩かた、背せとも謂いはず、びし／＼と打うちのめして、

(さあ何どうだ、お前まへ、男をとこを思おもひ切きるか、それを思おも  
 ひ切きりさへすれば復なほる病びやう氣きぢやないか、何どうだ、さ  
 あ是これでも言いふ事ことを聞きかないか、藥くすりは利きかないか。)

と責せめますのださうであります、其その苦くるしさが  
 耐たへられませぬ處ところから、

(御ご免めんなさいまし、御ご免めんなさいまし、思おもひ切きりま  
 す。)

と息いきの下したで詫わびます。それでは歸かへして遣やると言い  
 ふ、お雪ゆきはいつの間まにか舊もとの閨ねやに歸かへつて居をります。  
 翌あくる晩ばんになると又また昨ゆう夜へのやうに、同おなじ女をんなが來きて手てを取と  
 つて引ひき出して、彼かの孤ひと家つやへ連つれれてまゐり、釘くぎだ、繩なは  
 だ、抜ぬけ髪かみだ、蜥と蜴かげの尾をだわ、肋あはら骨ほねだわ、同おなじ事ことを繰くり  
 返かへして、骨ほね身みに應こたへよと打うち擲ちやくする。

(お前、可加減な事を言つて、些とも思ひ切る様子は無いではないか。さあ、思ひ切れ、思ひ切ると判然言へ、是でも薬は未だ利かぬか。)

と言ふのださうでありますな。

申すまでもありません、お雪は到底も辛抱の出来る事ではないのですから、屹度思ひ切ると言ふ。それではと云つて歸します。

翌晩も、又翌晩も、連夜の事で屹度時刻を違へず、其の緑青で鑄出したやうな、蒼い女が遣つて参り、例の孤家へ連れ出すのださうであります、口頭ばかりで思ひ切らない、不埒な奴、引摺りな阿魔めと、果は憤りを發して打ち打擲を續けるのださうでございます。

お雪は是を口にするさへ耐へられない風情に見えました。

「貴方、何うして思ひ切れませんのでございませう。私は餘り折檻が辛うございますから、確に思ひ切りますと言ふんですけれども、又其の翌晩同じ事

を言つて苦しめられます時、自分でも、成程と心付  
きますが、本當は思ひ切れないのでございますよ。

何うして是が思ひ切れませう、因縁とでも申しま  
すのか、何う考へ直しましても、叱つて見ても宥め  
て見ても、自分が自由にならないのでございますか  
ら、大方今に責め殺されて了ひませう。」

と云ふ、顔の糞れ、手足の細り、たゆげな息使ひ、  
小宮山の目にも、秋の蝶の日に當ツたら消えさうに  
見えまして、

「死ぬのは些とも厭ひませぬけれども、晩に又酷  
い目に逢ふのかと、毎日々々それを待つてゐるのが  
辛くつてなりません。貴方お察し遊ばして。」

本當に慾も未來も忘れまして何うぞまあ一晩安々  
寐て、而して死にますれば、思ひ置く事はないと存  
じながら、それさへ自由になりません、餘りと云へ  
ば悔しうございましたのに、恚うやつてお傍に置い  
て下さいましたから、何時になう胸の動悸も鎮りま  
して、恚ニ嬉しい事はございませぬ。まあ然ぞお草  
臥なさいまして、お眠うもございませうし、お可煩

うございませうのに、つい御言葉に甘えまして、飛んだ失禮を致しました。」

人にも言はぬ積り積つた苦勞を、甚に胸に蓄へて居りましたか、其の容體ではなか／＼一通りではなからうと思ふ一部始終を、悉しく申したのであります。

曩から默然として、唯打額いて居りました小宮山は、何と思ひましたか力強く、恰も虎を搏にするが如き意氣込で、蒲團の端を景氣能く丁と打つて、むく／＼と身を起し、然も勇ましい顔で、莞爾と笑ひまして、

「譯はない、姉さん、何の事だな。」

「皆そりや熱ねつの所せ為いだ、熱ねつだよ。姉ねえさんも知しつて  
 るだらうが、熱ねつぢや色々いろくな事ことを見るみるものさ。疫えやみの神かみ  
 だの瘡ほうさうの神かみだのと、能よく言いふぢやないか、皆みんな之これは  
 病人びやうじんが其その熱ねつの形かたちを見るみるんだつさ。

なかにも、是これは些ちいつと私わたしが知ちか己づきの者ものの維あし新しん前ぜん後ごの  
 話はなしだけれども、一ひとり人り、踊をどりで奉ほう公こうをして、下した谷や邊へんの或ある  
 お大名だいみやうの奥おくで、お小こ姓しやうを勤つとめたのがね、或ある晩ばんお相あひ手て  
 から下さがつて、部へ屋やへ、平ふだん生たんよりは夜よが更ふけて居あたん  
 だから、早さつ速そくお勤つとめの衣い裳しやうを脱ぬいでちやんと伸のして、  
 是こりや女をんなの嗜たしなみだ、姉ねえさんなんぞも遣やるだらうぢやな  
 いか。

「はい。」

まあお聞ききそれから綺しまのお召めし縮ちりめん緬めん、裏うらに紫むらさ縮ちりめん緬めんの  
 附ついた寝ね衣まきだつたさうだ、其そ奴いつを着きて、紅こう梅ばいの扱し帯しき  
 をしめて、蒲ふとん團たんの上うへで片かた膝ひざを立てたてる、お前まへ、後おく毛くれを  
 搔かき上げて、懷くわい紙しで白おしろい粉こなを彼あつち方こつち、拭ふいて取とる内うちに、  
 唇くちびるに障さはると些ちいと紅べにが附ついたらう。お小こ姓しやうがね、皺しわ

を伸のしてその白粉おしろいの着ついた懐紙くわいしを見みてゐたが、何なんと  
思おもつたか、高島田たかしまだに挿さしてゐる銀ぎんの平打ちひらうちの簪かんざしが  
附ついてゐる、是これは助高屋すけだかやとなつた、澤村さはむら訥弁とつべんの紋もんな  
んで、其それを此この小姓こしやうが、大層たいそう鼻肩ひいきにしたんだつさ。  
簪かんざしをぐいと抜ぬいて些ちいと見みるとね、莞爾にっこり笑わらひながら、  
そら今いま口紅くちべにの附ついた懐紙くわいしにぐる／＼巻まいて、と戴いたい  
たとまあ思おもひ。

可いいかい、其それを文庫ぶんこへ了しまつて、さあ寝支度ねじたくも出で来き  
た、行燈あんどうの灯ひを雪洞ほんぼりに移うつして、此奴こいつを持もつとつと  
立たつて、絹きぬの鼻緒はなをの嵌すがつた重かさね草履ぞうりをばだ／＼、引ひ  
摺ずつて、派手はでな女をんなだから、まあ長襦袢ながじゆばんなんかちら／  
＼としたらうよ。

長廊下ながらうかを傳つたつて便所べんじよへ行ゆくものだ。矢やだの、鐵砲てつぽう  
だの、それ大袈裟おほげさな帯おびが入いるのだから、便所べんじよは大おほき  
い、廣ひろい事こと、疊たゝみで二疊位てふくらあは敷しけるのだと云いふよ。其それ  
へ入はいらうとするとね、えへん！ ともいはず歌うたも詠よ  
まないが、中なかに人ひとのゐるやうな氣勢けはひがするから、弗ふ  
と立停たちどまつた、暫しばらく待まつてゝも、一向かうに出でて來こない、  
氣きを鎮しづめて能よく考かんがへると、何有なあに、何も入はいつてゐはし  
ないやうだつたつさ。

え、姐さん變ぢやないか、氣が差すだらう。それから其のお小姓は、雪洞を置いて、ばたりと戸を開けたんだ、途端に、大變なものが、お前心持を悪くしては可けない、是が皆病の所為だ。

戸を開けると一所に、中に眞俯向けになつてゐた、穢い婆が、何とも云ひやうのない顔を上げて、じろりと見た、其の白髪と云ふものが一通りではない、銀の針金のやうなのが、薄を一束刈つたやうに、ざら／＼と逆様に立つた。お小姓は其ツ限。

さあ、お奥では大騒動、可恐しい大熱だから傳染ツゞても悪し、本人も心許ないと云ふので、親許へ下げたのだ。醫者はね、お前、手を放して了つ、にけれども、是は日ならず復つたよ。

我に反るやうになつてから、其の娘の言ふのには、現の中ながら何うかして病が復したいと、豫て信心をする湯島の天神様へ日參をした、其の最初の日から、自分が上がらうと云ふ、那の男坂の中程に廁で見た穢ない婆が、掴み付きさうにして控へて居るの



で、悄然と引返す。翌日行くと又居やがる。行つち  
や歸り、行つちや歸り、丁度二十日の間、三七二十  
一日目の朝、念が届いてお宮の鰐口に縋りさへすれ  
ば、命の綱は繋げるんだけれども、婆に邪魔をされ  
て此坂が登れないでは、所詮是や扶からない、え、  
悔しいな、縦令中途で取殺されるまでも、お參を為  
すに措くものかと、切齒をして、下じめをしつかり  
としめ直し、雪駄を脱いですた／＼と登り掛けた。

遮つてゐた婆は、今娘の登つて來るのを、可恐し  
い顔で睨め附けたが、ひよろ／＼と搦つて、冷い手  
で咽をしめた、あれと、言つたけれども、最う手足  
は利かず、講談でもよく言ふがね、既に危き其處  
へ。

「上の鳥居の際へ一人出て来たのが、是を見るとつか／＼と下りた、黒縮緬三ツ紋の羽織、仙臺平の袴、黒羽二重の紋附を着て宗十郎頭巾を冠り、金銀を鑲めた大小、雪駄穿、白足袋で、色の白い好い男の、年若な武士で、大小などは旭にきら／＼して、其の立派さと云つたらなかつたさうだよ。石談の上の方から、ずっと寄つて、

（推參な、婆あ見苦しい。）と言ひさま、お前、疫病 神の襟首を取つて、坂の下へずでんだうと逆様に投げ飛ばした、可い心持ぢやないか。お小姓の難有さ、神とも佛とも唯もう手を合せて、其の武士を伏拜んだと思ふと、我に返つたと云ふ。

それから熱が醒めて、あの濡紙を剥ぐやうに、全快をしたんだがね、病氣の品に依つては随分然云ふ事が有勝のもの。

お前の女に責められるのも、今の話と同じそれは神経と云ふものなんだから、確乎して氣を確に持つ

て御覽、大丈夫だ、屹度那ものが連れ出しに来るなんて事はありやしない。何も私が學者ぶつて、お前さんがそれまでに判然した事を言ふんだもの、嘘だの、馬鹿々々しいなどは決して思ふんぢやないよ。可いかい、姐さん、何うだ、解つたかね。」

と小宮山は且つ慰め、且つ諭したのであります、然う致しますと、其の物語の調子も良く、取つた譬も腑に落ちましたものと、見えて、

「然やうでございますかね。」

と申した事は纒ながら、能く心も鎮つて、體も落着いたやうであります。

「然うとも、全くだ。大丈夫だよ、何有那樣に氣に懸ける事はない、ほんの些いと氣を取直すばかりで、那樣可怪しいものは西の海へさらりださ。」

「唯、難有う存じます、あのう、お蔭様で安心を致しました所為か、少々眠くなつて參つたやうでございますわ。」

と言ひ難さうに申しました。

「さあ／＼、寝るが可い、寝るが可い。何でも氣を休めるが一番だよ、今夜は附いてゐるから安心をおし。」

「はい。」

と言つてお雪は深く頷きましたが、靜に枕を向へ返して、暫くはものも言はないで居りましたが、又密と小宮山の方へ一〽向直り、

「あのう、壁の方を向いて居りますと、矢張彼處から抜け出して來ますやうで、怖くつてなりませんから、何うぞお顔の方に向かして置いて下さいましな。」

「うむ、可いとも。」

「でございますけれども……。」

「何うした。」

「あのう、極が悪うございますよ。」

とほんのり瞼を染めながら、目を塞いで然も頼母しさう、力としまするやう、小宮山の胸で顔を隠すやうに横顔を見せ、床を隔てながら櫛卷の頭を下げ、

口の上邊まで衾の襟を引寄せましたが、頓てすや／＼と寝入つたのであります。

其時の様子は、甚ニに嬉しさうであつた。――と、今でも小宮山が申します。扨て小宮山は、勿論寝られる譯ではありませぬから、暫くお雪の様子を見てゐたのであります。良初夜過となりました。

山中の湯泉宿は、寂然として静り返り、遠くの方でざらり／＼と、湯女が湯殿を洗ひながら、歌を唄ふのが聞えます。

此の界限近國の藝妓などに、たゞ此の湯女歌ばかりで呼びものになつてゐるのがありますくらゐ。怠けたやうな、淋しいやうな、然うかと云ふと冴えた調子で、間を長く引張つて唄ひますが、是を聞くと何となく睡眠劑を服まされるやうな心持で、

桂清水で手拭拾た、

是も小川の温泉の流れ。

などゝ云ふ、況んや巖に滴るのか、湯槽へ落つる

のか、湯氣ゆげの凝こつたのか、湯女ゆな歌うたの間あひ日ま々々／＼に、ば  
ちゃん／＼と響ひびきまするに於おいてをや。

十四

これへ何と、前觸のあつた百萬遍を持ちこ  
らうではありませんか、座中の紳士貴婦人方、都育  
ちのお方にはお覚えはないのであります、三太  
やあい、迷イ兒の迷イ兒の三太やあいと、鉦を叩い  
て山の裾を廻る聲だの、百萬遍の念佛などは餘り結  
構なものではありません。南無阿彌陀佛 南無  
阿彌陀・・・南無阿彌陀。

亭主は然ぞ勝手に天窓から夜具をすつぱりであら  
うと、心に可笑しく思ひます、小宮山は山氣膚に  
染み渡り、小用が達したくなりました。

折角可い心地で寝て居るものを起しては氣の毒だ。  
勇士は轡の音に目を覺ますとか、美人が袞の音に起  
きませぬやう、そつと抜出して用達しをしてまゐり、  
往復 何事もなかつたのであります、廊下の一  
方、今小宮山が行つた反對の隅の方で、柱が三つば  
かり見えて、其で一つ／＼掛けてあります薄暗い洋  
燈の間を縫つて、ひら／＼と目に遮つた、不思議な

影がありました。其が天井の一尺ばかり下を見え隠れに飛びますから、小宮山は驚いて、入り掛けた座敷の障子を開けも遣らず、はてな、人魂にしては色が黒いと、思ひまする間も置かせず、飛ぶものは風を煽つて、小宮山が座敷の障子へ、ばたりと留つた。是は、是は、全くおいでなすつたか知らんと、屹と見まする、黒い人魂に羽が生えて、耳が出来た、明かに認めましたのは、些いと鳶くらゐはあらうと云ふ、大きな蝙蝠であります。

其奴が羽撃をして、ぐるり／＼と障子に打附かつて這ひ廻る様子、其の動くに従うて、部屋の中の燈火が、明くなり暗くなるのも、思ひなし心持の所為でありますか。

扱ては随筆に飛驒、信州などの山近な片田舎に、宿を借る旅人が、病もなく一晩の内に息の根が止る事が屢々有る、其は方言飛縁魔と稱へ、蝙蝠に似た嘴の尖つた異形なものが、長襦袢を着て扱帯を纏ひ、旅人の目には妖艶な女と見えて、寝て居るものゝ懐へ入り、嘴を開けると、上下で、口、鼻を蔽ひ、寝息を吸つて吸殺すが為だとございます。あらぬ



か、それか、何にしても妙ではない、恚やうなものを間の内へ入れてはならずと、小宮山は思案をしなから、片隅を五寸か一尺、開けるが早いか飛込んで、くるりと廻つて、ぴしやりと閉め、合せ目を押へ付けて、どつこいと踏張つたのであります。暫く、しつかりと押へ付けて、様子を窺つて居りましたが、其限物音もしませぬので、先づ可かつたと息を吐き、是から靜に衾の方を向きますと、豈圖らんや其の蝙蝠は座敷の中をふはり／＼。

南無三寶と呆氣に取られて、目を持った鼻つ先を、件の蝙蝠は横撫に一つ、ばさりと當て、向へ飛んだ。何様猫が冷たい處をこすられた時は、小宮山が其時の心持であります。

噓もならず、苦り切つて衝立つて居りますと、蝙蝠は翼を返して、斜に低う夜着の綴絲も震ふばかり、何も知らないですよ／＼と寝て居る、お雪の寝姿の周圍をば、ぐるり、ぐるり、ぐるりと三度。縫つて廻られる度に、うゝむ、うゝむ、うゝむと幽に呻いたと、見るが否や、萎れ伏したる女郎花が、無慙

や風かぜに吹ふき亂みだされて、お雪ゆきはむつくと起おきありました  
のであります。小宮山こみやまは論ろんが無ない、我われを忘わすれて後しりへ  
にだうと坐すわりました。

蝙蝠こうもりは翻ひるがへつて、向側むかうがはの障子しやうじの隙間すきまから、ひら／＼  
と出でたと思おもふと、お雪ゆきが後あとに跟ついてずつと。

蚊帳かやを出いで、未だまだ障子しやうじあり夏なつの月つき、雨戸あまとを開あける  
でもなく、唯風たゞかぜの入はひるばかりの隙間すきまから、體からだがすつ  
と細ほそくなり、水みづに映うつる柳やなぎの蔭かげの隠かくれたやうに、ふ  
と外そとへ出でて見みえなくなりましたと申まをしますな。勿論もちろん、  
蝙蝠こうもりに引ひきだ出だされたんで。

十五

小宮山は切齒をなして、我赤檜を割つて八角に削りなし、鐵の輪十六を嵌めたる棒を携へず、彦四郎定宗の刀を帯びず、三池の傳太光世が差添を前半に手挟まずと雖も、男子だ、然かも江戸ッ兒だ、一旦請合つた女をむざ／＼魔に取られてなるものかと、追駈けざまに足踏をしたのであります。生憎神通がないので、是は當然に障子を開け、又雨戸を開けて、縁側から庭へ寝衣姿、跣足のまゝで飛下りる。

戸外は眞晝のやうな良い月夜、蟲の飛び交ふさへ見えるくらゐ、生茂つた草が一筋に靡いて、白玉の露の散る中を、一文字に駈けて行くお雪の姿が、早や小さくなつて見えまする。

小宮山は蝙蝠の如く手を擴げて、遠くから組んでも留めむず勢。

「おうい、おうい、お雪さん、お雪さん、お雪さん、お雪さん。」

と聲を限り、是や串戯をしては可けないぜと、思はず獨言を言ひながら、露草を踏しだき、薄を搔分け、苳萱を押遣つて、韋駄天のやうに追懸けまする、姿は草の中に見え隠れて、恰も是れ月夜に兎の踊るやう。

「お雪さん、おうい、お雪さん。」

間も良近くなり、聲も届きましたか、お雪は弗と歩を停めて、後を振返ると兩の手を合せました。助けてくれと云ふのであらう、哀れさも、不便さも慥ばかりなるは、と駈け着ける中、操の絲に掛けられたやう、お雪は、左へ右へ蹠踉して、しなやかな姿を揉み、しばらく争つて居るやうでありました。けれども、又、颯と駈け出して、あはやと云ふ中に影も形も見失つたのであります。

處へ、彼の魚津の沖の名物としてあります、蜃氣樓の中の小屋のやうなのが一軒、月夜に灯も見えず、前途に朦朧として顕れました。

小宮山は三藏法師を攫はれた悟空と云ふ格で、きよる／＼と四邊をニして居りましたが、頂は遠く、

四邊は廣野、縱令蝙蝠の翼に乗つても、虚空へ飛び  
上る法ではあるまい、瞬一つ為切らぬ中、お雪の姿  
を隠したは此家の内に相違ないぞ、這奴！ 小川山  
の妖怪ござんなれと、右から左へ、左から右へ取つ  
て返して、小宮山は此家の周囲をぐる／＼と廻つて  
窺ひましたが、敢て要害を見るには當らぬ。何の蝸  
牛見たやうな住居だ、此の中に踏み込んで罷り違へ  
ば、穀を背負つても逃げられると、高を括つて度胸  
が坐つたのでありますから、威勢よく突立つて凜々  
とした大音聲。

「お頼み申す、お頼み申す！ お頼み申す！」  
と續けざまに聲を懸けたが、内は森として應がな  
い、耳を澄すと物音もしないで、却つて遠くの方で、  
化けた蛙が固まつて鳴くやうに、南無阿彌陀  
佛々々々々々々、南無阿彌陀佛々々々々々々。と百  
萬遍。眉を顰めた小宮山は、癩に障るから苛立つて  
喚いたり。

「お頼み申す。」  
すると、何うでございませう、鼻ツ先の板戸が音

もしないで、すらりと開く。

「騒々しいぢやないかね。」  
顔を出したのが、鼻の尖った、目の鋭い、可恐しく丈の高い、蒼い色の衣服を着た。凄い年増。一目見ても見紛ふ處はない、お雪が話した其なんで。

小宮山は思はず退つた、女は其の我にもあらぬ小宮山の天窓から足の爪尖まで、じろりと見て、片頬笑をしたから可恐しいや。

「おや、おいでなさい、柏屋のお客だね。」  
言語道斷、先を越されて小宮山はとぼんと致し、  
「へい。」と言つて、目をばちくりするばかりであります。

「まあ、御苦勞様だつたね。曩から來るだらうと思つて、甚に待つてゐたか知れないよ。さあまあ此方へお上りなさい、少し用があるから。」  
と言つた、文句が氣に入らないね、用があるんなざ容易でなさう。

相手は女だ、城は蝸牛、何程の事やある、何うとも勝手に為やがれと、小宮山は唐突かれて、度膽を掴まれたのでありますから、少々捨鉢の氣味これあり、臆せず後に續くと、割合に廣々とした一間へ通す。燈火はありませんが暗いやうな明るいやうな、疊の數も能く見える、一體其の明がと云ふと、女が身に纏つてゐる、其の眞蒼な色の着物から膚を通して、四邊に射擴がるやうに思はれるのであります。

「些いと託ける事があるのだから、折角見えたものを情なく追歸すのも、お氣の毒だと思つて、通して上げましたがね、熟として待つて居なさい。私の方に支度があるのだから、お前さん又大きな聲を出したり、威張つたり、お騒ぎだと為になりません

よ。

と頭から呑んで懸つて、其のまゝ何處かへ、ずい呑まれた小宮山は、怪しい女の胃袋の中で消化れたやうに、蹲つて其へ。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、風が引いたり寄せたりして聞えまする、百萬遍。

忌々しいなあ、道中ぢや彌次郎兵衛も是に弱つたつけ、耐つたものではないと、密と四邊を二しますると、塵一ツ葉も目を遮らぬ此の間の内に床が一つ、草を銜へた神農様の像が一軸懸つて居りまするので、小宮山は譯が解らず、何でも是は氣を落着けるに若く事なしだと、下ツ腹へ力を入れて控へて居ります。又しても百萬遍。小宮山は其を聞くと惡寒がするくらゐ、聞くまい、聞くまいとする耳へ、ひい／＼女の泣聲が入りました。屹となつて、さあ始めやがつた、那ン畜生、又肋の骨で遣つてるな、此の儘ぢや居られないと、突立ちました小宮山は、早く既にお雪が話の内の一員に、化し了したのでありまする。

其の場へ踏み込み扶けてくれうと、突然隔の襖を開けて、次の間へ飛込むと、廣さも、様子も同じやうな部屋、又同じやうな襖がある。引開けると何も



なく、矢張り六疊ばかりの、廣さも、様子も、又襖がある。がたりと開ける、何もなくて少しも違はない部屋であります。

阿房宮より可恐しく廣いやと小宮山は顛倒して、手當り次第に開けた／＼。幾度遣つても筍の皮を剥くに異ならずでありますから、呆れ果てゝ（＝）と尻餅、茫然四邊を＝しますると、神農様の畫像を掛けた、曩女が通したのと同じ部屋へ、おや／＼おや。又南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と耳に入ると、今度は小宮山も釣込まれて、思はず南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

其時すらりと襖を開け、

「誰方だい、今お騒ぎなすつたのは。」

「へい。」といった、後はもうお念佛になりさうな、小宮山は恐る／＼、女の微笑んで居ります顔を見て、何うか恚うか、まあ殺されずに濟みさうだと、思ふばかりでございます。

「一體物好で恚＝所へ入つて来たお前さんは、怖

いものが見たいのだらう。少々ばかりね。」

「いえ、何。」と口の内。

「まあ、おいでなさい。」

妾に跟いて此方へと、宣示すが如く大様に申して、蕭然と立つて導きますから、詮方なしに跟いて行く。土間が冷く踵に障つたと申しますると、早や小宮山の顔色蒼然！

話に聞いた、青色の其の燈火、其の臺、其の荒筵、其の四邊の物の氣勢。

お雪は臺の向へしどけなく、崩折れて仆れてゐたのであります。女は臺の一方へ、此の形なしの江戸ツ兒を差置いて、一方へお雪を仆した真中へぬツくと立ち、袖短な着物の眞白な腕を、筵の上へ長く差し伸して、ざくりと釘を一ト掴。

「何うだね、お客様。」

「何う致しまして。」

小宮山は慇懃に辭退をいたしまする。

十七

「是を知つて居なさるかへ。」

と二の腕を曲げて、件の釘を乳の邊へ齎して、掌を擴げて据ゑた。

「何う致しまして。」

「知らない？」

「いえ、何、存じて居ります。」

「それぢや是は。」

「へい。」

「女の脱髪。」

小宮山は慌しく、

「何う致しまして。」

「それぢや御覧。」と撮んで宙で下げたから、そゝげた黒髪がさら／＼と動きました。

「いえ、何、存じて居ります。」

「是は。」

「存じて居ります。」

「それから。」

「存じて居ります。」

「それでは、何の用に立つんだか、使ひ方を知つて居るのかへ。」

迂潤知らないなぞと言はうものなら、使ひ方を見せようと、此の可恐しい魔法の道具を振廻されては大變と、小宮山は逸早く、

「えゝ、最う存じて居りますとも。」

と一際念入りに答へたのであります。言葉尻も終らぬ中、繩も釘もはら／＼と振り掛つた、小宮山はあツとばかり。

些いと皆様に申上げますが、此處で何うぞ貴方がたがあツと仰有つた時の、手附、顔色に體の工合をお考へなすつて下さいまし。小宮山は結局、あツと言つた手、足、顔、其のまゝで、指の尖も動かなくなつたのであります。

「よく御存じでございましたね。」

と嘲弄くする如く、態と丁寧に申しながら、尻目に懸けてにたりとして、向へ廻り、お雪の肩へ其の白い手を掛けました。

畜生！ 飛附いて扶けようと思つたが、動ける處の沙汰ではないので、人は恚やうな苦しい場合にも自ら馬鹿々々しい滑稽の趣味を解するのであります、小宮山は餘の事に噴出して、我と我身を打笑ひ、小宮山何と云ふさまだ、宛でこりや木戸錢を見てのお戻りと云ふ風だ、東西、」と肚の内。

女はお雪の肩を揺動しましたが、何とも不思議な凄しい聲で、

「雪や、苦しいか。」

お雪はいとゞ俯向いて居た顔を、がつくりと俯向けました。

「うむ、もう可い、今夜は酷い目に逢はしやないから、心配をする事はないんだよ。是まで手を變へ、品を變へ、色々にして見たが、何うしてもお前は思ひ切らない、何思ひ切れないのだな、それならそれで可いやうにして上げようから。」  
と言聞かしながら、小宮山の方を振向いたのであります。

「お客様、お前は性悪だよ、此子が其が為に此の通りの苦勞をして居る、篠田と云ふ人と懇意なのぢやないか、それだのにさ、道中荷が重くなると思つて、託も聞かうとはせず、知らん顔をして聞いて居たらう。」と鋭い目で熟と見られた時は、天窓から、悚然として、安本龜八作、小宮山良助あつと云ふ體にござりまする活人形へ、氷を浴せたやうになりました。

「其換り少しばかり、重い荷を背負はして上げるから、大事にして東京まで持つて行きなさい。託と云ふのは其なんだがね、お雪は到底も扶らないのだから、私も今まで乗懸つた舟で、此娘の魂をお前さんにおんぶをさして上げるからね、密と篠田の處まで持つて行くのだよ。然ぞまあお邪魔でございませうねえ。」

小宮山が其の形で突立つたまゝ、口も利けないのに、女は好きな事をほざいたのであります。

其から女は身に纏つた、其の一重の衣を脱ぎ捨てまして、一絲も掛けざる裸體になりました。小宮山は負惜、此奴温泉場の化物だけに裸體だと思ツて居ります。女は又一つの青い色の壇を取出しましたから、是から怨念が顕れるのだと恐を懐くと、豫て聞いたとは様子が違ひ、是は掌へ三滴ばかり仙女香を使ふ鹽梅に、兩の掌でぴた／＼と揉んで、肩から腕へ塗り付け、胸から腹へ塗り下げ、襟耳の裏、頓ては太股、脹經、足の爪先まで、隈なく塗り廻しますると、眞直に立上りましたのであります。

小宮山は肚の内で、

「東西。」

女は然う致して、的面に臺に向ひまして、ちゝんぷい／＼、御代の御寶と言つたのだか何だか解りま

せぬが、口に怪しい呪文を唱へて、ばさり／＼と雙腕を、左右へ眞直に伸したのを上下に動かした。體がぶる／＼と顫へたと見るが早いか、搔消す如く裸身の女は消えて、一羽の大蝙蝠となりました。てございまする。

例の如くふは／＼と兩三度土間の隅々を縫ひました。が、突然俯向けになつて居るお雪の顔へ、顔を押當て、翼で其の細い項を抱いて、仰向けに嘴でお雪の口を壓へまして、すう、すうと息を吸ふのであります。

是を見せられた小宮山は、はツと思つて息を引いたが、如何ともする事叶はず、依然として其のあツと云ふ體。

二度三度、五度六度、良有つて息を吸取つたと見えましたが、お雪の體は死んだものゝやうになつて礎と横様に仆れて了ひました。

吃驚仰天一は之のみならず、蝙蝠がすツと來て小宮山の懐へ、ふはりと入りましたので、再び



あつと云つて飛び上ると同時に、心付きましたのは、  
舊の柏屋の座敷に寝て居たのであります。

大息を吐いて、蒲團の上へ起上つた、小宮山は、  
自分の體か、人のものか、能くは解らず、何となく  
後見らるゝやうな氣がするので、振つて見ますと、  
障子が一枚、其外に雨戸が一枚、明らさまに開いて  
月が射し、露なり、草なり、野も、山も、緲々とし  
て、鶏、犬の聲も聞えませぬ。何よりも先づ氣遣は  
しい、お雪はと思ふ傍に、今息を吸取られて仆れた  
と同じ形になつて、生死は知らず、姿ばかりはあり  
ました。

小宮山は冷たい汗が流れるばかり、南無阿彌陀  
佛々々々々々々々々、南無阿彌陀佛々々々々々々々々、と隣  
で操り進む百萬遍の聲。

「姐さん、姐さん、」

小聲で呼んで見たが返事がないので、若しやとも  
う耐らず、夜具の上から揺振りました。

「お雪さん。」

三聲ばかり呼ぶと、細く目を開いて小宮山の顔を見るが否や、然も／＼物に恐れた様子で、飛着くやうに、小宮山の帯に縋り、身を引緊めるやうにして、坐つた膝に突伏します。戦く背中を小宮山は緊乎と抱いた、様子は見届けたのでありますから、哀れさも又百倍。

怖さは小宮山も同じ事、お雪の背中へ額を着けて、夜の明くるのをたゞ、一刻千秋の思で待構へまする内に疲れた所為か、我にもあらずそろ／＼と睡みましたと見えて、目が覺めると、月の夜は變り、山の端に晴々しい旭、草木の露は金色を鏤めて居りました。

密と膝から下すと、お雪は矢張り其のまゝに、すや／＼と寝入つて居る。

「お早うございます。」と聲を懸けて、機嫌聞きに亭主が眞先、百萬遍さへ止みますれば、此の親仁大元氣で、頓てお鐵も參り、

「お客様お早うございます。」

小宮山は早速嗽 手水を致して、心持も薩張しま  
 したが、右左から亭主、女共が問ひ懸けまする昨晚  
 の様子は、否、唯お雪が些いと魘されたばかりだと  
 言つて、仔細は明しませんでございました、是は後  
 の事を慮つて、皆が恐れ氣なくお雪の介抱を為て遣  
 る事が出来るやうにと、氣を着けたのであります。

お雪の病氣を復すにも怪しいものを退治るにも、  
 耆婆扁鵲に及ばず、宮本武藏、岩見重太郎にも及ば  
 ず、たゞ篠田の心一つであると悟りましたので、未  
 だ、二日三日も居て介抱もして遣りたかつたのでは  
 ありますけれども、小宮山は自分の力では及ばない  
 事を知り、何よりも先づ篠田に逢つてと、恚う存じ  
 ましたので、急がぬ旅ながら早速出立を致しました。

其の柏屋を立ちまする時も、お雪は未だ昨夜の儘  
 寝て居たのであります。失禮な起しませうと口々  
 に騒ぐを制して、朝餉も別間に於いて認め、お前さ

ん方が何も恐がる程の事はないのだから、大勢側に  
附いて看病をしてお遣なさいと、暮々も申し残し  
て後髪を引かれながら。

其日、糸魚川から汽船に乗つて、直江津に着きま  
した晩、小宮山は夷屋と云ふ本町の旅籠屋に泊りま  
した、宵の口は何事も無かつたのでありまするが、  
眞夜中に弗と同じ衾にお雪の寝て居るのを、歴々と  
見ましたので、喫驚する途端に、寝姿が向むきにな  
つた其の櫛巻が溢れて、疊の上へざらりと云ふ音。

枕に着かるゝ處ではありませぬ、あゝ越中と越後  
と國は變つても、女の念は離れぬかと豈夫に魂を託  
つたとまでは、信じなかつたのでありまするけれど  
も、熟く溜息をしたのであります。

夜が明けると、一番の上り汽車、是が碓氷の隧道  
を越えます時、其の幾つ目であつたさうで。

小宮山は何心なく顔を出して、眞暗な道の様子を  
透して居ると、山清水の滴る隧道の腹へ、汽車の室

内の灯で、其顔が映つたのであります、と並んで女の顔が映りました。確に其がお雪の面影。

其限何事もなく、汽車は川中島を越え、淺間の煙を望み、次第に武藏の平原に近づきます。

上野に着いたのは午後の九時半、都に秋風の立つはじめ、熊谷土手から降りましたのが其時は篠を亂すやうな大雨でございました、俣の便も得られぬ處から、小宮山は旅馴れては居る事なり、蝙蝠傘を差したまゝで、湯島新花町の下宿へ歸らうと云ふので、あの切通へ懸りました時分には、ぴつたり人通りがございません。後から、

「姐さん、参りませうか、姐さん。」

と聲を懸けたものがある。

振り返つて見ると誰も居ませんで、たゞざあざつと云ふ雨に紛れて、轍の音は聞えませぬが、一名の車夫が跟いて來たのであります。

小宮山は悚然として、雨の中に其のまゝ立停つて、待てよ、或はこりや託つて來たのかも知れぬと、悚

然なんとしましたが、何なにしろ、自宅じたくへ背負しよひ込んでこは妙めうならずと、直すぐに歩あゆみを轉てんじて、本郷元町ほんがうもとまちへ参まゐりました。

此處こゝは篠田しのだが下宿げしゆくして居ゐる處ところであります、行馴ゆきなれてゐる門口かどぐち、猶豫ためらはず立向たちむかふと、未だまだ早いのに、此この雨あめの故せゐか、最もう閉しまつて居をりましたが、小宮山こみやまは馴なれてゐる、此この門もんと並ならんで、看護婦會かんごふくわいがあります、雨滴あまだれを拂はらひながら其間そのあひだの路地ろぢに入はいると、突當つきあたりの二階かいが篠田しのだの座敷ざしき、灯ひも點ついて、寝ねない様子やうす。すると未だまだ聲こゑを懸かけない先さきに、二階かいでは其灯そのひを持つて、何處どこへか出でたと見みえて、障子しやつじが暗くらくなりました。暫しばしく待つて居ゐても歸かへりませぬ。

下したへ下おりたのであらうも知しれぬ、其それならば却かへつて門口かどぐちで呼よぶ方ほうが早手はやて廻まはしたと、小宮山こみやまは又引返またひきかへして参まゐりますと、つい今錠いまじやうの下りて居ゐた下宿屋げしやくやの戸とが、手てを掛かけると譯わけもなく開あきましたと申まをします。

何事なにごとも思おもはず開あけて入はいり、上框あがりかまちに立たちましたが、帳場ちやうばに寝込ねこんで居をりますから、むざとは入はいらないで、

「篠田、篠田。」

と高らかに呼はりますると、三聲とは懸けさせず、篠田は早速に下りて来て、

「あゝ、今歸つたのかえ、さあ／＼まあ上り給

へ。」

と急遽先に立ちます。小宮山は後に跟いて二階に上り、座敷に通ると、篠田が洋燈を持つたまゝ、入口に立停つて、内を透し、

「おや、」と言つて、きよろ／＼四邊を■して居りまするが、何か氣抜のしたらしい。小宮山はずつと寄つて、其の背を叩かぬばかり、

「何うした。」

「最う何も彼も御存じの事だから、些とも隠す事はない、たゞ感謝するんだがね、君が連れて来て一足先へ入つたお雪が、今まで此處に居たのに、何處へ行つたらう。」

と眞顔になつて申しまする。

小宮山は又悚然とした。

「えゝ、お雪さんが、甚■様子で。」

「實は今夜本を見て起きて居ると、唯た今だ、頻

にお頼み申しますと言ふ女の聲、誰に用があつて来たのか知らぬが、此の雨の中を然ぞ困るだらうと、僕が下りて行つて開けて遣つたが、見るとお雪ぢやないか。小宮山さんと一所だと言ふ、體は雨に濡れてびつしより絞るやう、話は後からと早速此處へ連れて来たが、那の姿で坐つて居た、疊も未だ湿つて居るだらうよ。」

と篠田はうる／＼してばた／＼疊の上を撫でゝ見ます。此様子に小宮山は、暫く腕組をして、黙つて考へて居ましたが、開き直つたと云ふ形で、  
「篠田、色々話はあるが、何も彼も明日出直して来よう、其ままでまあ君心を鎮めて待つてくれ。それぢや託り物を渡したぜ。」

「えゝ。」  
「否、託り物は渡したんだぜ。」  
「託り物つて何だ。」  
「今受取つた其さ。」  
「何を、」と篠田は目も据らないで慌てゝ居ります。



「まあ、受取つたと言つてくれ。左も右も言つてくれ、後で解る事だから頼む、後生だから。」

魂の請状を取らうと為るのでありますから、其の掛引は難かしい、無暗と強ひられて篠田は夢現とも辨へず、それぢや然うよ、請取つたと、挨拶があるや否や、小宮山は篠田の許を辭して、一生懸命に駈出した、さあ荷物は渡した、東京へ着いたわ、雨も小止みか此奴は妙と、急いで我家へ。

翌日取も置かず篠田を尋ねて、一部始終詳しい話を致しますと、省みて居所も知らさないで居た篠田は、蒼くなつて顫へ一上つたと申しますよ。

是から二人連名で、小川の温泉へ手紙を出した。一週間ばかり経つて、小宮山が見覺のある彼の肌に着けた浴衣と、其時着て居りました、一白粉垢の着いた袷とを、小包で送つて来て、あはれお雪は亡くなりましたと云ふ添状。篠田は今でも獨身で居ります。二人とも其の命日は長く忘れませんと申すのであります。飛んだ長くなりまして、御退屈様、濟みま

せんでございました、失禮<sup>しつれい</sup>。

【完】